

「初年次教育・導入教育のためのテキスト 『大学生のための読書案内—入門編—』 制作に向けての共同研究」(2013-2014) 研究報告

Report: Collaborative Research in Producing *Book Guide for University Students: Basic Recommendations* for the First Year Education Program (2013-2014)

小倉 齊

OGURA Hitoshi

谷口 純世

TANIGUCHI Sumiyo

中嶋 真弓

NAKASHIMA Mayumi

永井 聖剛

NAGAI Kiyotake

1 はじめに

本研究は、「初年次・導入教育のためのテキスト『愛知淑徳大学入学生のためのブックガイド(仮題)』制作に向けての共同研究」として、2012年4月から2014年3月までの2年間にわたり、愛知淑徳大学の研究助成(特別教育研究)を受けて実施されたものである。主たる研究成果は、2013年3月1日に初版(『大学生のための読書案内—入門編—』)、2014年3月1日に改訂版(『大学生のための読書案内2014—入門編—』)を制作・配付¹⁾することですでに報告済みであるが、本報告書では、活動の当初に掲げた課題・目的に沿って、研究結果を多角度から検証することとしたい。(小倉齊)

2 研究目的とその背景

本研究は、高大連携推進委員会の一プロジェクトとして企画・立案されたものである。共同研究の起案・推進に当たって、担当者(編集委員会)は以下のような「研究理由(目的)」を掲げ、高大連携推進委員会にて諮った(2011年11月)。

近年、大学生の学力低下傾向を背景に、導入教育(初年次教育・リメディアル教育など)の重要性が強調されるようになってきた。本学でも、前半入試合格者へのフォローアップ教育、基幹科目の設置、新入生面談など、着実な環境整備が進みつつあるものの、導入教育の意義と必要性が全教職員にひろく共有されているとはいえないのが現状である。

『愛知淑徳大学入学生のためのブックガイド(仮題)』制作を目標に据えたこの試みは、できるだけ多くの教員から、本学への入学生に読んでもらいたい「この一冊」を推薦してもらい、その生の声を一冊の書物に編集し、直接入学生に届けることを目論むものである。同主旨の書物は、すでにいくつかの大学が試み、実際に出版されてもいるが、本学の入学生の

実情を鑑みたときにどのようなものが好ましいのか、個々の教員の現状認識と問題意識とを汲み上げ、集約するためにも、本学独自の試みがなされることの意義は小さくないと考える。また本研究は、「愛知淑徳大学の入学生に欠けている学力・知識とは何か」を分析するためのリサーチの役割をも兼ねているといえるだろう。

出来上がったブックガイドは、入学生が大学で勉強することの意味と目的意識とを見定めるきっかけになることはもちろんだが（情報リテラシーとキャリア教育への寄与）、大学図書館の活動との連携や、各学部の初年次導入教育を編成していく際の基礎資料・教材としての発展的な活用も期待できる。また、このブックガイドを、本学学生に求められる基礎的な「教養」の具体像として捉えるのならば、ここから、学生に提供されるべき教養教育のあり方を再検討してゆくことも可能だろう。ブックガイドの作成・配布で完結してしまうことなく、この『ブックガイド』を資料として読み込み、そこで得られたことを、導入教育のあり方についての更なる研究と実践に接続させたいと考えている。

高大連携推進委員会での数度の審議を経て、2012年6月には、本学のすべての専任教員に「趣意書」および「執筆要領」を配付し、寄稿を呼びかける運びとなった。前掲の「研究理由（目的）」と重複する内容もあるが、以下に「趣意書」の一部を抜粋し引用する。

この『大学生のための読書案内—入門編—（仮題）』制作を目標に据えた試みは、大学1年生に求められる基礎的な教養という観点から「大学での学修生活に臨むにあたっていま読んでもらいたい一冊」を先生方に推薦してもらい、その生の声を一冊の書物にまとめて直接入学生に届けることを主眼とするものです。同様の書物は、すでにいくつかの大学が試み、実際に出版されてもいますが、本学入学生の実情に合うもの・本学教員の思いや願いを伝えるものという意味において、本学独自の試みがなされることの意義は小さくないと考えます。またこの試みは、「愛知淑徳大学の新生入生に欠けている学力・知識とは何か」を分析するためのリサーチの役割をも兼ねています。

出来上がった『読書案内』は、入学生が大学という学修の場で勉強することの意味と目的意識とを見定めるよいきっかけになるものと信じます。また、大学図書館の活動との連携や、各学部の初年次導入教育を編成していく際の基礎資料・教材・課題としての活用も可能と考えます。

上記の二つの文章から、この共同研究の目的を要約するならば、およそ以下のようなになるだろう。

- ①本学入学生向けのブックガイドを制作し、全入学生に配付し、導入教育に資するものとする。
- ②すべての教員に対して寄稿を呼びかけることで、導入教育の意義と必要性とを共有する

機縁とする。

- ③本学の入学生に欠けている学力・知識、あるいは、本学教員が新入生に求める「教養」の姿を分析するための資料とする。

周知のように、大学における初年次教育（導入教育）やいわゆる高大連携（高大接続）の意識の高まりの背景には、2008年度の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」がある。この答申には、「高等学校卒業者の過半数が大学へ進学し、労働市場において大学卒業者が新規採用者の中心になりつつある中、人生の新しい段階へと移行する若者をいかに支援していくかが、学士課程教育においても重要な課題となる」という現状認識が示され、さらに、大学における「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」の必要性が謳われた。本学では、2009年度に高大連携推進委員会が設置され、こうした問題への対処にかかる学内基盤作りが進められてきたが、実際のところは、2012年度に至ってもなお、いまだ全学的な関心・理解を得られない状況であった。

谷口哲也・友野伸一郎によれば、初年次教育は「大学の教育力」を調査するときの鍵となるという。その理由はこうである。「大学にはこの「初年次教育」の専門家はほとんどいないのですから、すべての教員が自分の「専門」以外の教育に立ち向かわざるを得ないわけです。つまり、入学してくる大学生の変化に大学・学部としてどう対応しようとするのか、教育力の差が最も表出するポイントだと考えたからです」。

重要な問題提起である。大学における教養教育が衰退した（そのきっかけは、1991年の大学設置基準の大綱化である）今日において、ほとんどの教員にとっての教育上の関心事はいわゆる専門課程のカリキュラムの中にあり、教員はその外部に目を向けたがらないのが現実である。しかし、ユニバーサル化した大学の教育が直面している切実な課題は、専門課程以前に凝縮して存している。教員が専門課程のカリキュラムの内部に閉じ籠もれば閉じ籠もるほど、教育目標と入学生の学力・意識との齟齬は大きくなるばかりである。これはそのまま、その大学の「学士の質」「学士力」の低下に直結し、長期的に見れば、大学の寿命を縮めかねない「ボタンの掛け違い」となり、取り返しのつかない悪循環を惹起することになる。

大学が置かれている現実には、「すべての教員が自分の「専門」以外の教育に立ち向かわざるを得ない」状況にあり、これを看過することはできない。ただし、多くの教員はそのことを正視しない。正視すれば何らかの対応策を考えざるを得ず、対応策を考えることは誰か他の人の仕事だと思いたい。自分は自分の志した専門分野の研究に専念したいからである（これらの気持ちは十分に理解できる）。

本学のすべての専任教員に対して、入学生向けの「読書案内」の推薦文を依頼するという試みの主たる目的は、初年次教育の意義と必要性を全教員が共有し、「読書案内」執筆という形でそれにコミットしてもらい、ということに尽きる。1冊の本を薦めるということを通して、

入学生の学力の現状と課題とを教員一人ひとりが認識し、大学での学修へとスムーズに移行させるため（高大接続・導入教育のため）に、あるいは学力不足を補うため（リメディアル教育のため）に、どんな1冊が有効なのかを考える。また、その集積が一冊の書物に結実することで、私たち教員の新入生観が相互に可視化される。——これらの効果を期待して呼びかけられた本企画には、すべての学部やセンター等の大部分の教員から協力が得られ、結果、161名からの推薦文を収めた『読書案内』が出来上がり、2013年度の新入生全員に配付された。また、翌2014年度の入学生に対しては、182名分の推薦文を集めて増補された『読書案内2014』を配付することができた。すでにこのことだけで、本学の「大学の教育力」は一段レベルアップしたと言えるだろうし、本学に「教育力」を発展させる余白がまだあることも証明された。

ただし、まだまだ手放して喜んでいられないことも事実として重く受け止めなくてはならない。『読書案内』が有効に活用され、それによる教育効果が確認されて初めて、「教育力」の向上は検証されるものだからだ。

以下、上記①～③の研究目的に沿うかたちで、より詳細に検証を進めていくことにしたい。

（永井聖剛）

3 導入教育の教材としての『大学生のための読書案内—入門編—』

『読書案内』は、例年、新学期に（授業などで）配付されるのではなく、『履修要覧』や『授業概要（シラバス）』などととも、学期前に「新入生バック」と呼ばれる配付物セットの形で配られている。したがって、「この『読書案内』を用いて……をするように」といった具体的な読書指導がなされているわけではない。いわば、「自助」に基づく修養を促すかたちで供されていることになるが、その意味では、収録された推薦図書がどれくらい学生の手にとられたのか（読まれたのか）が、本書の「教材」としての効果을推し量る指標となるだろう。

巻末に付した資料1「『大学生のための読書案内』掲載図書の貸出状況³」は、『読書案内』配付の前（2011-2012）と後（2013-2014）における貸出状況の比較である。一瞥して分かるように、配付の前後で明らかに推薦図書の貸出件数は増加傾向にあり（『読書案内』配付の対象が1年生のみであることに注目したい。全体の四分の一の学生の動向の変化がこれだけの数字に結びついたことは明白である）、中には、「伸び率」が19.0ポイントという推薦図書もある。『読書案内』は、明らかに入学者の読書への関心を喚起しているといえるだろう。

とはいうものの、この成果が、学部・学科のカリキュラムとの連動など、組織だった仕掛けによって得られたわけではないこと（企図せぬ結果であること）もまた確かである。学部・学科によっては、『読書案内』を利用した導入教育も一部行われている⁴が、編集委員会でその全体像を把握したり、また利用を促進したりすることは未だなし得てないのが現状である。今後は、編集委員会もしくは高大連携教育運営委員会が積極的に情報発信を行ない、学部・学科の基礎演習などでの利用を促し、その結果を集約するなどの連携強化を図らねばならない。まず手始めに、具体的かつ有効な『読書案内』の利用法を周知するなどの、提案型の利用促進を推

し進めることが必要だろう。

また、大学図書館との相互連携も重要である。すでに大学図書館では、2013年度以来、毎年、『読書案内』刊行のタイミングに合わせた企画展示(特設コーナーの設置)を、両キャンパスの図書館で開催し、『読書案内』の周知に一役買ってもらっているところである。以下は、「『読書案内』特設コーナーをご利用ください」と題された、図書館からのニュース(2013年5月13日)の本文である。

『大学生のための読書案内入門編』は、本学の161人の教員が「大学での学修生活に臨むにあたって、いま読んで欲しい一冊」を選んだものです。

大学初年次教育の一環として企画・刊行され、2013年度の新入生の全員に配布されました。つまり「愛知淑徳大学の入学生」向けにターゲットを絞ったブックガイドです。とはいえ、ここに掲載された本は、新入生でなくとも、魅力的な一冊になる可能性を秘めています。

図書館では、この本に推薦されたすべての本を取りそろえ、特設コーナーでの展示を、5月10日(金)から6月10日(月)までの一ヶ月間、開催しています。

長久手図書館・1階 (1) ブラウジングコーナー (2) カラーコピー機奥の書架

星が丘図書館・4階 指定図書/新着図書コーナーの並びの書架

もちろん『大学生のための読書案内入門編』も置いてあります。

図書館のヘビーユーザーの方も、これから本気で使い始める方も、あまり興味のない方も、「これぞ、という一冊」がずらりと並んだ書架は見応えがあります。

並んだ本の行間から教員の思いや願いを垣間見て、新しい知の体験につながれば、と願っております。

どうぞ図書館の特設コーナーをご利用ください⁵⁾。

この企画展示によって、入学生以外の学生(2~4年生)にも『読書案内』の存在が知られるようになったことの意味は小さくない。上級生からの「『読書案内』を手に入れることはできないのか」といった照会も数多く(残念ながら応えることはできなかったが)、一定の訴求効果はあったものと評価できる。

学部・学科の授業との連動を図ることができるようになれば、将来的には、図書館の授業利用などの促進に繋がるだろう。高校までの「図書室」利用とは異なる「大学図書館」活用術を体験的に身につけさせることは、「初年次学生が大学生になること」の第一歩でもある。「大学図書館」への誘導が全入学者に対して自然に促進されるようになれば、知の拠点としての大学図書館の役割はおのずと高まるだろうし、また、大学図書館に求められる「リメディアル教育の場」としての新たな役割⁶⁾も次第に実態化してゆくものと期待される。

(永井聖剛)

4 導入教育の意義と必要性とを共有する機縁としての『大学生のための読書案内—入門編—』

読書には、感動やカタルシスのための読書（鑑賞的読書）とそうでない読書があるが、『読書案内』が求めるのが後者にほかならぬことは言うまでもない。また後者を、通覧的な読書と批判的な読書とに分類する見方¹があるが、この『読書案内』が、通覧的・批判的読書を促す機縁になり得ることは、以下の4-1、4-2の観点からも明らかである。

4-1 そもそも『読書案内』という形態それ自体が「通覧的」であるということ

ビルドゥングスroman
 教養小説としてよく知られる夏目漱石『三四郎』（1908年）の中に、次のような場面がある。高等学校を卒業して東京帝国大学に入学したばかりの三四郎がはじめて図書館に赴くのだが、まずはその膨大な蔵書に面食らってしまう。「読んでみたい。けれども何を読むかに至っては、別に判然した考えがない。読んでみなければ分からないが、何かあの奥にたくさんありそうに思う」。また、実際に何冊か借りてみると「どんな本を借りても、きっと誰か一度は眼を通してしていると云う事実を発見した」。このとき三四郎は、「これでは到底遣り切れない」と思った（引用は新潮文庫による）。

このエピソードを通して三四郎が発見したものは、学問の奥深さと崇高さである。もちろん彼は、具体的には何も学んでいない。知識が増えたわけでもないし、何らかの真理を得たわけでもない。ただし、この、身につまされた経験はきわめて重要である。

『読書案内』巻末に収めた「あとがき」に「本書を読み進めていくうちにみなさんは、『大学生のための読書案内』が「大学四年間の学修にすぐに役立つ書物案内」などではなく、より射程の広いものであることにも気付くでしょう」と記した。これは『読書案内』の効用を端的に言い表したもののだが、それは、三四郎が図書館の書庫入口に立って「何かあの奥にたくさんありそうに思う」という実感を得たこととよく似ている。別の喩えを用いるならば、見晴らしのよい高台に学生を立たせて、「大学での学修」にはこれだけの広がりとお行きとがあるのだよと一望の下にそれを示し、大雑把な空間イメージを思い描かせるのに似ている。本来ならば系統的な拾い読みを通して、テーマ目録や概念地図のようなものを各自に作らせるのが「通覧的」な読書なのだろうが、ひとまず、慣れ親しんだことのない専門図書類のタイトルと推薦文とを横断的に眺め、めまいのような感覚を体験させること——遠くまで見渡すことのできるパースペクティブを得ること——それ自体が「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」の第一歩として有意義なのだ。

いずれ彼らが身につけなければならない「批判的」な読解力は、このパースペクティブが前提になってはじめて成立するものである（鑑賞的読書には、遠くまで見渡すことのできるパースペクティブは不要である）。読書行為の、「いま・ここ」における感動やカタルシスのための読書と、「いま・ここ」に囚われない普遍的な真理や善悪を探究するための読書との違いを理解するためにも、まずいちど「大学での知」の入口に立って、「奥にたくさんありそう」という実感を体験させることが肝要である。

4-2 入学者の「読書」観を更新する機縁たり得ること

三四郎は東京帝国大学の図書館で未だ経験したことのない知的興奮におののいたが、もちろん、それまで彼は、図書館と無縁だったわけではない。熊本の高等学校にも図書館(図書室)はあったはずだからである。しかし彼は、帝国大学の図書館で専門的学知の崇高さでも呼ぶべきものに驚き、自己の卑小さを思い知ることになる。それは具体的に言えば、高等学校の図書館(図書室)と大学図書館との蔵書の多寡や専門性の高低(それは装幀という表象や書き込みという歴史性をともなって顕現する)によってもたらされた体験であった。

中等教育までの読書と高等教育における読書とが異質なものであること。連続性よりも非連続性を強調すること。これらの意識付けはきわめて重要である。なぜなら、高等学校までの読書が「教わる」ためのものだとすれば、大学でのそれは「発見する」ためのものであり、両者には本質的な違いがあるからである。端的に言えば、「教科書」と「専門書」の違いということになるが、この両者の間に横たわる難易度の差や、用いられている語彙の違い、抽象度の飛躍の幅などはおそらく学生が想定している以上のものであるはずである。

かつて、大学入学者の文章読解力が「大学入試現代文」によって担保されていた時代があった(いうまでもなく、大学入試に出題される「現代文」とは、出題に当たる大学教員がその年に読んだ専門書の一部の内容理解を問うものである)。いや、今でも一定以上の難易度を保つ大学入試問題が、そうした機能を果たしていることもあろうが、ユニバーサル化した時代の大学入試一般にその機能を求めるのは、現実的に難しい。AO入試や自己推薦型の入試など、大学入試国語の合格レベルによって担保される実力や基礎学力を有することなく大学に入る回路がいくらかでも用意されているからである。また、受験者の読解力の実情に応じた「手心」とでも言うべき手立てを、出題者が加える傾向があるからである(そうでないと、合格者不在などという事態になりかねない)。

かつては、受験生が手こずる「大学入試現代文」の内容やレベルを通じて、入学後に必要な読解力と必読が求められる図書レベル(新書あるいは入門的な専門書あたりか)が何となく分かったものだが、いまは「大学入試現代文」にそうした効用は期待できないというわけだ。このあたりの問題を、たとえば、受験参考書『MD現代文小論文』(1998年9月、朝日出版社)の「まえがき」(有坂誠人)は、次のように端的に指摘している。

おおかたの予想に反し、大学入試問題は「現代」を反映するものです。私たちが置かれている社会のさまざまな側面が、その中に直接的に映し出されています。政治、経済、文化、社会のほとんどあらゆる面で、これまでの価値が根底的に問い直されている現在、当然にも、こうした問いかけは入試問題の中にも現われています。問題を作成する側の問題意識がそうさせるといってさしつかえないでしょう。あるいは、その存立の根拠を(それだけでなく、存立そのものも)問われつつあることを自覚し始めた大学が、自らの今後のあり方を自問する動きであるともいえます。

そして、国語においては—特に現代文と小論文においては—そうした傾向がはっきりと現われています。(中略)

ところが現代は、いわば反教養主義のトレンドの真っ只中にあります。人びとの中に、教養に対する過度の抗体が形成され、強い免疫症状をさえ呈しています。いっさいの教養や造詣になんら気おくれを覚えることのない体質が築かれてしまっています。

こうした観点に立てば、『大学生のための読書案内』は、それが仮に「入門編」であったとしても、大学入学者の読書量不足や読解力低下の流れに歯止めを掛け、改善を図るものでなければならない。前掲書は「教養の有無を問う大学と教養にとんと関心のない世間との間でどのように折り合いをつけるかという差し迫った問い」とも記しているが、「大学」が「世間=反教養主義」に迎合することで「折り合い」をつけることを選んだとしたら、我々教員は全員、すべての初年次学生向けの授業目標を中等教育の水準にまで引き下げる必要があるだろう（それがユニバーサル化の現状なのだから）。しかし、現実的には、それは不可能であるし、大学の自己否定そのものにつながることもである。むしろ我々教員は、「世間」すなわち入学者を「大学」が求める高みにまで（それがいかに飛躍を含むものであっても）引き上げなくてはならない。そのための何らかの働きかけを、入学者に対してしなくてはならない。

大学教員は、たとえ入学者の学力が大学生としてのそれに及ばないと分かりきっていても、大学の授業で扱うレベルの専門性や批評性を備えた書物や課題を提示することで、入学者の側の覚悟を改めさせ、自覚を促す必要がある。『大学生のための読書案内』を与え、読ませることは、まさにその好機である。では実際のところ、出来上がった『大学生のための読書案内—入門編—』は、そのようなメッセージを発信する書物たり得ているだろうか。

結果は、概ねその役目を果たし得るものとなった、と認めてよいだろう。提出された推薦書のラインナップを眺めてみると、「世間」の一員としての入学者を「大学」の水準にまで持ち上げようという狙い（本来ならば、推薦文と同時に提出してもらったアンケート結果のまとめを示すべきであるが、その準備がまだできていない。いずれ機会を改めて高覧いただきたい）が透けて見えるものがほとんどであり、本学教員の一定の見識を示す結果となった。教員が「われわれ」意識を具体的に抱く機会はまだ多くはないが、本学への入学生に読んでもらいたい「この一冊」を推薦するという共通の経験をし、その結果を可視化することで「われわれ」意識を持ち得たことは、たいへん有意義であった。この傾向は、年々、この『読書案内』が改訂を重ねるたびに強まっていくことだろう。

教員から学生へと『読書案内』が手渡されることが大切なのは言うまでもないが、『読書案内』を介して教員相互が連繋を確認し合う機会になることを切に願うものである（組織的に『読書案内』への寄稿に取り組んでいる心理学部や言語聴覚専攻のような学部・学科がある一方で、なかなか足並みが揃わない学科・専攻があるのが現状である）。たとえば、学部・学科内で『読書案内』を使ってどんな導入教育ができるかを話し合う機会が設けられたり、ライ

ンナップに加える図書の見直しについての協議が学部・学科で行われたりするようになれば、教育をともに考える「場」としての『読書案内』の機能が、さらに増すことになるだろう。

(永井聖剛)

5 本学教員が新入生に求める「教養」の姿を分析するための資料としての『読書案内』

阿部謹也は、『「教養」とは何か』(1997年5月、講談社現代新書)の中で、「教養」の成立について、およそ次のようなことを述べている。

人間の長い歴史の中で、12世紀頃のヨーロッパにおいてはじめて「人生いかに生きるべきか」という問いが発生した。この頃に「都市」が発生し、地縁や血縁にしばられない自由な市民が成立したからである。この場合の「自由」とは、それまでは父親の仕事を継ぐことが当然とされていたものが、いまや自分で選べるようになったこと、つまり職業選択の自由を指している。このとき人は、はじめて「いかに生きるか」という問いに直面したというのである。そして、同時にそれは「教養」のはじまりでもあった。

ただし、「教養」の歴史は、一筋縄にはいかなかった。よく知られているように、「いかに生きるか」と悩んだ市民たちは、ラテン語に書かれた古典にその答えを求めた。当時、彼らの世俗的な日常語の世界には「いかに生きるか」という問いに答えてくれるものがなかったからである。その結果、「教養」は現実世界(たとえば職業教育)に即応するものというよりも、観想的な学問の世界に求められることになった。この世界で「いかに生きるべきか」という問いからはじまった「教養」が、しばしば、この世界から遊離したものを求めるというねじれが生じたのはこのためである。そしてそれは、読書という個人的かつ孤独な営みの中に「教養」を囲い込むことでもあった。「教養」と哲学・文学・芸術などとの強い(内面的な)結びつきは、すでにその起源から見られたことなのである。こうした状況は、日本の「教養」においてもおよそ同じであった。大正期の旧制高校を発祥地とする教養主義が、長い間、岩波文庫や文学全集類の古典的(人文系)素養によって支えられてきたことはよく知られているだろう⁸。

こうした「教養」観が、今でもそのまま残存しているとは言い難いものの、「教養」を形成する知識の大半が人文系(人文社会および社会科学)のそれであることは脈々と引き継がれている。たとえばその一例として、広島大学『大学入学生に薦める101冊の本 新版』(2009年3月、岩波書店)の選書を見てみよう。以下は、本書に掲載された書物を国立国会図書館のNDC分類に基づいてジャンル分けしたものの割合である。

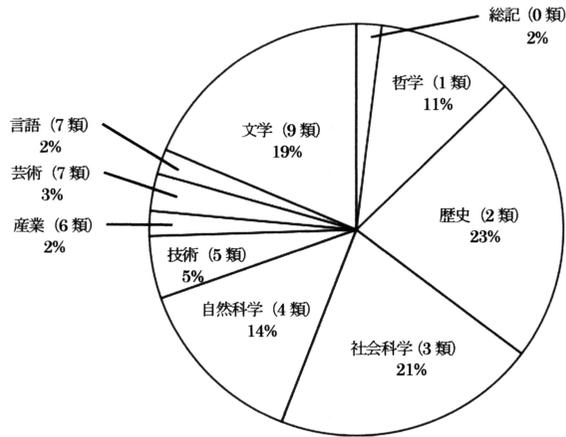


図1 『大学入学生に薦める101冊の本 新版』のジャンル構成

この『大学入学生に薦める101冊の本 新版』の選書の方針について、本書の「はじめに」には次のように記されている。伝統的な「教養」観との連続性と独自性がよく示されているので、そのまま引用しよう。

本書旧版のときと同じように、「二〇世紀までの人類の知的遺産を継承し、二一世紀の課題につなげる」という思いは今回の新版でも変わりません。したがって、ここで選んだ本は、過去の教養論議でたえず話題にされてきた〈古典中心かつ文学重視の教養書〉ではなく、また、たんなるベストセラーの本でもありません。私たち編集委員が、〈現代の教養〉を育てる手がかりになるだろうと考えて選んだ一〇一冊の書物です。もちろん、〈現代の教養〉とは言いながら、ここで選んだ本も「古典の名著」の文化伝統を受け継いでいるでしょうから、「一〇一冊の本」を開けば、世界の名著や日本の名著におのずとたどり着くことになります。

ちなみに、本書が掲げる「現代の教養」とは、現代の「知的社会」に求められる高度な専門性、技術や知識を現実の社会で役立て使いこなすために必要な「人間味溢れた理解力や洞察力」「判断力」を意味する。

さてこれと、本学の『大学生のための読書案内2014—入門編—』とを比較してみよう⁹⁾。

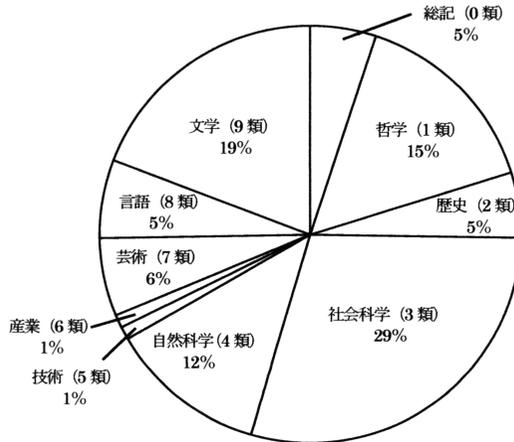


図2 『大学生のための読書案内2014—入門編—』のジャンル構成

一見してよく分かるのが、全体としてよく似たジャンル構成になっているということである。二つの大学の事例のみを比較することに意味があるのかという批判を承知の上でいえば、編集委員の明確な編集方針に基づいて、旧版から半数近くの本を入れ替えて成ったという「一〇一冊の本」の編成と、編集委員が全教員に呼びかけて集まった任意の約180冊の編成が、おおその傾向を共有しているというのは興味深い。

もちろん、両者には質的な違いもある。ここでは二点に限ってそれを指摘しておこう。一つめは、「歴史 (2類)」が少なく「社会科学 (3類)」が多いという点であり、ごく大雑把にこれを言い換えれば「過去よりも現在」への偏向となる。実際にラインナップを見てみれば分かるが、本学では、社会学、社会福祉、国際問題 (政治・経済)、教育など、現代社会の諸問題に関連する書物を推薦する教員が数多かった。一方で、広島大学のリストに (おそらく、編集方針のもとに意図的に) 配されていた、梅棹忠夫『世界史とわたし—文明を旅する』(NHKブックス、1887年)、阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』(ちくま文庫、2007年)、サイード『オリエンタリズム』(平凡社ライブラリー、1997年)、ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』(岩波書店、1999年)、高坂正堯『現代史の中で考える』(1997年、新潮選書)のように、世界史、人類史の大きな枠組みの中での自己理解を促す書物は、本学の『読書案内』にもっとあってよい。「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知らうと努力している状態」にある人物を「教養」のある人物と呼ぶ¹⁰のなら、自己の位置を知る座標軸は、空間的な軸と時間的な軸とがほどよいバランスで交じり合っている必要があるからだ。

二冊の「読書案内」の質的差異の二つめは、いわゆる「古典」的な著作の扱いである。先に引用したように、広島大学の「一〇一冊の本」の場合、これを繙けば、「世界の名著や日本の名著におのずとたどり着く」とされた。〈現代の教養〉が「古典の名著」の文化・伝統を受け

継ぐものにはかならないという確信があるからである。一方の本学の『読書案内』からうかがえるのは、古典に依拠した「教養」の不在（たとえば、「教養」の重要性を説く啓蒙・啓発書を読んで「教養」をつける、といった）であり、すなわちこれは、いわゆる「古典を失った大学」¹⁾の姿なのかもしれない。古典よりも、アカデミックリテラシーやクリティカルシンキングといった「学士力」の根幹とされる素養が強調され、知識社会でありグローバル化社会でもある現代社会をよりよく生きる力の養成が求められる——これは、昨今の大学をとりまく状況を、実に素直に反映した姿であるようにも思われる。

つい「古典を失った」などと述べてしまったが、このことは決してネガティブに捉えられるべきではない。「本学の入学生に欠けている学力・知識、あるいは、本学教員が新入生に求める「教養」の姿」を析出することが目的である本研究にとっては、むしろ、クリアな回答が得られたというべきであろう。「入学生」（これは私たちが直面している現実を反映した存在である）の欠如部分を埋めつつ、さらに、彼らを「大学生」（これは私たちの観想的な世界を反映した存在である）の域にまで引き上げるのに必要な書物群が、おおよそこの『読書案内』に収められた書物の水準（書店の書棚の譬えでいえば、啓蒙・啓発書の棚から文庫・新書・選書の棚、専門書の棚のうち左端の「入門」「概論」のあたり）によって構成されるということであって、これは愛知淑徳大学という現場での経験が導き出した一定の見識あるいは集合知といってよいだろう。（永井聖剛）

6 今後の課題

以上、『大学生のための読書案内—入門編—』制作の経緯とその意義について、いくつかの見地から報告してきたが、最後に、「入門編」の次の一冊について簡単に触れて筆を擱くことにしたい。

当初、「入門編」を作ったからには、次は「応用編」を作ろうという計画があったが、この問題については慎重に検討を重ねているのが現状である。というのは、この「入門編」が「高大連携（接続）」あるいは「初年次教育」の現場で具体的にどのように活用され、どのように機能しているのかの検証が未だ十分ではなく、その検証次第では、より基本的な（つまり平易な）読書案内を先に編むべきだという方向性も考えられるからである。先ほど私は『『大学生のための読書案内』は、それが仮に「入門編」であったとしても、大学入学者の読書量不足や読解力低下の流れに歯止めを掛け、改善を図るものでなければならない』と書いたが、もちろんこれはひとつの態度の取り方であって、「大学入学者の読解力低下」の程度次第では、その不足分を埋めるための別の手立ても考え得るのではないか、ということである。

ただしその場合、より具体的な「読解力低下」の検証（どのレベルまで読めて、どのレベルから読めないのかの見極め）と、私たちが入学者に求める「読解力」や「教養」の具体像を定位するための突っ込んだ議論が不可欠となる。残念ながら、私たちはまだその段階にまでは至っていないが、他大学が入学者に課している入学前読書課題のリストを参考にし（文庫や新書類

に限定している事例が少ないようだ)、別の方法があるか否かについて検討しはじめてはいる。「2018年問題」という言葉があるように、いま、入学者の学力は昨年度と来年度とが同等であるとは限らない。不透明かつ流動的な状況下にある入学者の学力の把握は、大学の今後のあり方を見定める上で最重要課題といえよう。高大連携教育運営委員会が『読書案内』を切り口にしながら、このことについて何らかの建設的な問題提起ができればと考えている。

(永井聖剛)

7 おわりに

少子化・ユニバーサル化に伴う学習履歴の多様化や基礎学力不足の入学者増加がもたらす大学経営の危機的状況(入口をめぐる問題)、グローバル化・情報化に伴う雇用環境の変化(出口をめぐる問題)に挟まれ、大学教育のありようは厳しく問われ、授業内容・授業方法の質的転換が強く求められている。第三者評価、FD義務化、教育情報の公表、競争原理に基づく財政支援への転換、矢継ぎ早に出される答申から溢れ出るさまざまな質保証のための方策等々、大学内外から課せられるプレッシャーは日に日に強さを増している。これらの対応に追われ、改革に忙殺される中、われわれは改めて大学教育のあり方を考える時期に来ている。学生はどのように学び、成長しているのか。大学という教育組織は学生の学修と成長・成熟、幸福の実現にどのように寄与していくべきなのか。大学に所属する管理職・教員・職員の全員が、大学教育のあり方について考え、方針を共有することは急務である。

入試方法の多様化など、入学者選抜をめぐる環境の変化により、この10年ほどの間に大学生の学習意欲の低下、目的意識の稀薄化、基礎学力の不足が顕著になってきている。大学の授業についていけない、大学で何をやったらいいかわからない。2008年度の中央教育審議会の調査によると、こうした大学1年生が半数近くを占めるといふ。2006年度の文部科学省の調査では、補習や補完授業を実施する大学が3割に上っており、今はこの割合がさらに高くなっているはずだ。2008年、中央教育審議会は「学士課程教育の構築に向けて」という答申をおこない、高校から大学への接続のあり方を見直し、スムーズな移行を支援する取り組みとして初年次教育の充実を課題にあげた。初年次教育は、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」(『学士課程教育の構築に向けて(答申)』(中央教育審議会、2008年12月24日))とされる。そもそも初年次教育は、主体性や意欲の乏しい学生への対応策としてアメリカで考案されたシステムで、本来は、大学生生活への違和感を解消し、早期の中途退学を防止する取り組みであったはずだ。この点を踏まえ、愛知淑徳大学では自己認識から自己実現へのアクションプランを立案・作成し、10年先、20年先にどう生きるのかを見つめ、考えさせるために、初年次教育にさまざまな方策を講じてきた。その柱ともいえるべきものが「日本語表現T1・T2」(T1は全学必修科目)の開講だ。「最近の学生は漢字が読めない、文章が書けない、ま

ともに話せない」などと、日本語基礎力の欠如を嘆いているだけでは問題は解決しない。初年次教育部門の日本語教育担当教員は、コミュニケーションツールとしての「本物の日本語力」を身につけさせることに重点を置いてきた。目標としたのは、社会に参画する力、よりよい人間関係を構築する力だ。この力は、社会を生き抜く力につながると確信している。また、コミュニケーションツールとして正確に日本語を使いこなすことが、表現力や思考力を高めるトレーニングにもなると考えている。

ところで、日本語を体系的に学び、日本語運用能力を身につけるために、あるいはより正確な言葉で「考え」、「理解し」、「表現する（伝える）」力を育成するために、何が必要なのか。それは、「読む」力（読解力）である。「読む」という行為について考えるとき、「解読」としての「読み」と「解釈」という「読み」の二つを意識したい。「解読」とは対象物の一義的な意味に到達することであり、「解釈」は読み手の時間、場所、状況に応じた多様な意味を生み出す。われわれは、おもに、実用文や論述的表現に対しては「解読」としての「読み」を、芸術表現に対しては「解釈」としての「読み」を目指すことになる。「読む」行為を通してわれわれは「世界」を構築し、世界の秘密や人生の謎について認識する。さらに、構築した「世界」と時代や社会・文化状況との間に脈絡をつけ、言語表現の背後に潜む時代や社会状況を読み解いていく。「読む」力を身につけることで、言語表現が必然的に文化的・社会的・政治的メッセージを持ち、読者に何らかの立場をとるよう誘惑するからくりの解明が可能となる。われわれは、「読む」行為・体験の蓄積を通して言語表現を「読む」ための多くのサンプルを得、自力で「読み」、「考える」トレーニングを重ねる。やがてそれは、メディア、社会、文化、人間存在の秘密を「読む」ことへとつながり、世の中の事象や人間存在を批判的に見る力、クリティカルシンキングの力を養う。

高校までの教育が知識教育であるとすれば、それに対置すべきは知的教育である。身につけるべき最も重要なものは、自分で考える力だ。言うまでもなく、そこには想像力も含まれる。それは、知識伝達的な教育では絶対に身につかない力だ。これは、初等・中等教育だけの問題ではなく、大学教育においてこそ意識化されなくてはならない課題なのである。教師が一方向的に知的情報・知識を教えるというスタイルは最早通用しない。教育とは、情報やスキルを学ばせることではなく、双方向的な知的情報のやりとりを通じて、教える者と教えられる者との間に成立する人間同士の関わり方そのものを体験的に学修させることである。

いま、学生たちの周りは、楽しいもので満ち溢れている。テレビ、インターネット、スマートフォン、メール、LINE、ゲーム。これらが、学生たちの思考力を脆弱なものにしている。人とのコミュニケーションは、面と向かって、直接言葉で触れあって、はじめて成立するものだ。学生たちは、大いに本を読み、考えるトレーニングをするべきだ。本は答えを求めない。学生たちは、自由にそれを解釈し、その本の著者の人生を客観的に学ぶことができるはずだ。

酒井邦嘉は「紙の本」を「読む」と言う行為の効用について述べている（『脳を作る読書—なぜ「紙の本が」人にとって必要なのか—』実業之日本社、2011年11月）。「読む」というこ

とは、単に視覚的にそれを脳に入力するというのではなく、足りない情報を想像力で補い、曖昧なところを解決しながら「自分の言葉」に置き換えていくプロセス」であり、「読む力は読書でしか鍛えることはできない」。「若い読者は、多様なスタイルの文章に触れたほうがよい」。「我流の偏った読書だけでは、基礎的な読む力の向上は」望むべくもなく、「高等教育を受ける学生は、それまで関心のなかった分野を含めたさまざまなテーマの文章に触れることで、幅広い「教養」を身につけることができる」はずである。大学教師は、自らを「一定の基準で良書を選び、段階別の多読と精読のプログラムをデザイン」するソムリエだと自認し、学生を「多様なスタイルの文章に触れ」させ、学生の段階に応じた読み方を伝授する「インストラクター・伝道者」として機能しなければならない。そして『大学生のための読書案内—入門編—』を編集し、入学者の読書への意欲を喚起することは、読書の「インストラクター・伝道者」としての最初の為事なのである。(小倉齊)

注

- 1) 以後も毎年増補改訂を加えて、2016年3月1日には第4版を制作・配付した。
- 2) 谷口哲也・友野伸一郎「河合塾からの初年次教育調査報告—学生を変容させる初年次教育はいかにあるべきか—」(河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか—全国大学調査からみえてきたこと—』、2010年6月、東信堂)
- 3) 本資料の作成にあたっては、本学図書館ことに山田稔氏の全面的な協力を仰いだ。
- 4) 英文学科の入学前課題(読書課題)の一部で『読書案内』で紹介された書物が選書されている例や、人間情報学部の「基礎ゼミ」(1年次前期必修)の中で『読書案内』が紹介されている例などが報告されている。また、個別の事情に応じた課題を与える際に『読書案内』で紹介された本のレポートを課す事例も報告されている。
- 5) http://www2.aasa.ac.jp/org/lib/j/using_j/news/archives/05-01-2013_05-31-2013.html
- 6) 「図書館将来計画懇話会報告書」(2012年2月、愛知淑徳大学図書館将来計画懇話会)
- 7) アドラー／ドーレン『本を読む本』(外山滋比古／槇未知子訳、1997年10月、講談社学術文庫)
- 8) 「教養」については、『「教養」とは何か』の他に、竹内洋『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』(2003年7月、中公新書)、荻部直『移りゆく「教養」』(2007年10月、NTT出版)、村上陽一郎『あらためて教養とは』(2009年3月、新潮文庫)などを参照。
- 9) 本データの提供においても、本学図書館・山田稔氏の協力を仰いだ。なお、元データから複本を除き、本学独自の排架になっている書物(文庫・新書)については、国立国会図書館のOPACでNDC区分を補うなどの修正を施したことを断っておく。
- 10) 阿部謹也『「教養」とは何か』(1997年5月、講談社現代新書)
- 11) 藤本夕衣『古典を失った大学—近代性の危機と教養の行方』(2012年9月、NTT出版)

資料1 『大学生のための読書案内』掲載図書の貸出状況

著者・作者	タイトル	長久手 本部	星が丘 分館	2013-2014 累計	長久手 本部	星が丘 分館	2011-2012 累計	伸び率
菊池聡, 谷口高士, 宮元博幸編	不思議現象なぜ信じるのか	19	1	20	5	0	5	4.0
ダンピサ・モロ	援助じやアフリカは発展しない	10	9	19	0	0	0	19.0
諸富祥彦	「とりあえず、5年」の生き方	1	16	17	0	4	4	4.3
中西正司, 上野千鶴子	当事者主権 (岩波新書)	17	0	17	0	0	0	17.0
中谷彰宏	大学時代しなければならぬ50のこと (PHP文庫)	9	8	17	0	0	0	17.0
ジュシカ・ウリアムズ	世界を見る目が変わる50の事実	5	11	16	1	5	6	2.7
三木清	人生論ノート 改版 (新潮文庫)	12	3	15	0	0	0	15.0
ティナ・シーリング	20歳のときを知っておきたかったこと	7	7	14	15	12	27	0.5
菱尚中	悩む力 続 (集英社新書)	10	4	14	1	0	1	14.0
時実利彦	人間であること (岩波新書)	13	1	14	0	0	0	14.0
菱尚中	悩む力 (集英社新書)	5	8	13	4	1	5	2.6
橋本剛	大学生のためのソーシャルスキル	6	7	13	4	0	4	3.3
NHK放送文化研究所編	現代日本人の意識構造 第7版 (NHKブックス)	13	0	13	4	0	4	3.3
小泉吉宏	そのまんまでいいよ: 新装版 (ブッタとシッタカブッタ)	10	3	13	0	0	0	13.0
朝日新聞科学グループ編	うろおぼえを解消する102項目 (ブルーバックス)	12	0	12	0	0	0	12.0
小泉吉宏	なあんでもないよ: 新装版 (ブッタとシッタカブッタ)	10	2	12	0	0	0	12.0
大山泰弘	利他のすすめ	11	1	12	0	0	0	12.0
宮沢賢治	注文の多い料理店/オツベルと象/グスコブドリの伝記ほか (ちくま文庫)	12	0	12	0	0	0	12.0
ボート・モラン	シャネル 人生を語る (中公文庫)	7	4	11	4	0	4	2.8
志水宏吉	学校にできること (角川選書)	7	4	11	3	0	3	3.7
池上彰	そうだったのか!現代史 [パート1] (集英社文庫)	1	10	11	2	0	2	5.5
呉善花	日本の曖昧力 (PHP新書)	5	5	10	1	5	6	1.7
鶴見良行	バナナと日本人 (岩波新書)	0	10	10	0	3	3	3.3
佐伯胖	「学ぶ」ということの意味	7	3	10	0	2	2	5.0
小川洋子	科学の扉をノックする	10	0	10	1	1	2	5.0
ヘッセ	シッタルタ (岩波文庫)	10	0	10	0	0	0	10.0
トマス・ブルフィンチ	ギリシア・ローマ神話 上 (角川文庫)	10	0	10	0	0	0	10.0
フリップ・ホ・ディック	トータル・リコール (ハヤカワ文庫)	8	2	10	0	0	0	10.0
ハヴァ・プレスブルゲル	ブラハ日記	10	0	10	0	0	0	10.0
許成準	超訳孫子の兵法	7	3	10	0	0	0	10.0
小暮真久	「20円」で世界をつなぐ仕事	2	7	9	6	7	13	0.7
藤盛和夫	生き方: 人間として一番大切なこと	1	8	9	0	13	13	0.7
二宮皓ほか	こんなに違う!世界の国語教科書 (メディアファクトリー新書)	9	0	9	9	0	9	1.0
池上彰	そうだったのか!現代史 パート2 (集英社文庫)	7	2	9	1	0	1	9.0
金城清子	生殖革命と人権 (中公新書)	8	1	9	0	0	0	9.0
齋藤孝	三色ボールペン情報活用術 (角川Oneテーマ21)	5	4	9	0	0	0	9.0
ハジューン・チャン	世界経済を破壊させる23の嘘	8	1	9	0	0	0	9.0
フレドリック・ヘレレン	スウェーデン式アイデア・ブック [1]	7	2	9	0	0	0	9.0
加藤秀俊	独学のすすめ (ちくま文庫)	3	6	9	0	0	0	9.0
吉海直人	新島八重 愛と闘いの生涯 (角川選書)	6	3	9	0	0	0	9.0
ジュリアン・ロイド・ウェッバー	パブロ・カザルス鳥の歌 (ちくま文庫)	9	0	9	0	0	0	9.0
藤原正彦	日本人の矜持 (新潮文庫)	8	1	9	0	0	0	9.0
小川一美ほか	スターアップ「心理学」	9	0	9	0	0	0	9.0
ドストエフスキー	カラマゾフの兄弟 1 (光文社古典新訳文庫)	8	0	8	19	2	21	0.4
ブルフィンチ	ギリシア・ローマ神話 改版 (岩波文庫)	8	0	8	5	0	5	1.6
越川禮子	江戸しぐさ	6	2	8	5	0	5	1.6
マルキ・ド・サド	悪徳の栄え 下 (新・マルキ・ド・サド選集:2,3)	8	0	8	3	0	3	2.7
マルキ・ド・サド	悪徳の栄え/悪徳の栄え 続 (滋澤龍彦翻訳全集:5)	8	0	8	0	2	2	4.0
ユーゴ	レ・ミゼラブル 改版 2 (岩波文庫)	8	0	8	1	0	1	8.0
新藤戸福造	武士道 改版 (岩波文庫)	8	0	8	0	0	0	8.0
喜多川泰	君と会えたから...	1	7	8	0	0	0	8.0
宮野尚美	共に生きる道	7	1	8	0	0	0	8.0
宮沢賢治	農民芸術概論/手帳/ノートほか (ちくま文庫)	8	0	8	0	0	0	8.0
山折哲徳	いま、こころを育むとは (小学館101新書)	8	0	8	0	0	0	8.0
林文子	会いたい人に会いに行きなさい	4	4	8	0	0	0	8.0
ヘルマン・ヘッセ	車輪の下 改版 (岩波文庫)	6	1	7	10	0	10	0.7
大谷泰照	日本人にとって英語とは何か	2	5	7	4	5	9	0.8
外山滋比古	思考の整理学 (ちくま文庫)	3	4	7	5	3	8	0.9
ドストエフスキー	カラマゾフの兄弟 2 (光文社古典新訳文庫)	7	0	7	6	0	6	1.2
玄田有史	希望のつくり方 (岩波新書)	6	1	7	5	1	6	1.2
遠藤周作	沈黙	7	0	7	1	0	1	7.0
谷内蜀博	働く意味とキャリア形成	4	3	7	0	1	1	7.0
養老孟司ほか	復興の精神 (新潮新書)	7	0	7	1	0	1	7.0
福沢諭吉	福翁自伝 (講談社学術文庫)	7	0	7	0	0	0	7.0
三橋貴明	国民の教養	7	0	7	0	0	0	7.0
曾野綾子	人間の基本 (新潮新書)	4	3	7	0	0	0	7.0
五味太郎	わにさんどきっはいしやさんどきっ 2版	5	2	7	0	0	0	7.0
岩城けい	さようなら、オレンジ	2	5	7	0	0	0	7.0
藤上慎一	大学生の学び・入門 (有斐閣アルマ:Interest)	0	6	6	4	0	4	1.5
ステューヴン・D・レイヴィット, スティーヴン・D・ダブナー	ヤバい経済学	3	3	6	0	4	4	1.5
池上彰	国際問題がわかる!世界地図の読み方	3	3	6	0	3	3	2.0
丸尾周造	「いき」の構造 (講談社学術文庫)	6	0	6	2	0	2	3.0
須藤功	折りの旅 (あるくみるきく双書)	6	0	6	0	1	1	6.0
金谷治武	孫子 新訂 (岩波文庫)	4	2	6	0	0	0	6.0
山田アニー	話すチカラをつくる本 (知的生きかた文庫)	0	6	6	0	0	0	6.0
トニー	最後の授業 (ポプラポケット文庫)	5	1	6	0	0	0	6.0
ニキ・リソコ	俺ルール!	5	1	6	0	0	0	6.0
養老孟司	バカの壁 (新潮新書)	3	2	5	6	3	9	0.6
廣野由美子	批評理論入門 (中公新書)	1	4	5	8	1	9	0.6
J.L. オースティン	言語と行為	5	0	5	5	0	5	1.0
アーサー・コナン・ドイル	バスカヴィル家の犬 (シャーロック・ホームズ全集)	5	0	5	4	0	4	1.3
スーザン・ハラー	視覚はよみがえる (筑摩選書)	5	0	5	4	0	4	1.3

「初年次教育・導入教育のためのテキスト『大学生のための読書案内―入門編―』
制作に向けての共同研究」(2013-2014) 研究報告 (小倉齊・谷口純世・中嶋真弓・永井聖剛)

著者・作者	タイトル	長久手 本館	星が丘 分館	2013-2014 集計	長久手 本館	星が丘 分館	2011-2012 集計	伸び率
ユーゴー	レ・ミゼラブル 改版 1 (岩波文庫)	5	0	5	3	0	3	1.7
梶井厚志	コトバの戦略的思考	3	2	5	0	2	2	2.5
佐藤剛史	弃当の日 (西日本新聞ブックレット)	5	0	5	1	0	1	5.0
シェリー・シーサラー	「悪意の情報」を見破る方法	5	0	5	1	0	1	5.0
山鳥重	「わかる」とはどういうことか (ちくま新書:339)	4	1	5	0	0	0	5.0
ダレル・ハブ	統計でウソをつく法 (ブルーバックス:8-120)	5	0	5	0	0	0	5.0
東後勝明	英語ひとすじの道	1	4	5	0	0	0	5.0
宮沢賢治	「春と修羅第三集」/「詩ノート」/「疾中」ほか (ちくま文庫)	5	0	5	0	0	0	5.0
宮沢賢治	ビデリアン大祭/土神ときつね/雁の童子ほか (ちくま文庫)	5	0	5	0	0	0	5.0
浅利慶太	劇団四季メソッド「美しい日本語の話し方」 (文春新書)	3	2	5	0	0	0	5.0
直塚玲子	欧米人が沈黙するとき	0	5	5	0	0	0	5.0
M.J.アドラー, C.V.ドーレ	本を読む本 (講談社学術文庫)	1	3	4	13	1	14	0.3
ダニエル・タメット	ぼくには数字が風景に見える	4	0	4	8	2	10	0.4
浅井春夫, 松本伊智朗, 湯澤直美編	子どもの貧困	3	1	4	4	5	9	0.4
アルク企画開発部編	大学生になったら洋書を読もう	0	4	4	8	0	8	0.5
藤沢晃治	「分かりやすい文章」の技術 (ブルーバックス)	1	3	4	3	2	5	0.8
鈴木光太郎	オオカミ少女はいなかった	3	1	4	4	1	5	0.8
ジグムント・バウマン	審判論	1	3	4	0	5	5	0.8
本多勝一	日本語の作文技術 (朝日文庫)	4	0	4	3	0	3	1.3
山田剛史, 林創	大学生のためのリサーチリテラシー入門	4	0	4	0	3	3	1.3
茨木のり子	おんなのことば	4	0	4	2	0	2	2.0
E.B. ゼックミスタ, J.E. ジョンソン	クリティカルシンキング	4	0	4	1	0	1	4.0
ヴィクトル・ユゴー	レ・ミゼラブル 1 (ヴィクトル・ユゴー文学館)	3	1	4	1	0	1	4.0
佐野眞一	目と耳と足を鍛える技術 (ちくまプリマー新書)	4	0	4	1	0	1	4.0
福岡伸一	世界は分けてもわからない (講談社現代新書)	4	0	4	1	0	1	4.0
田村隆一	田村隆一詩集 [正] (現代詩文庫)	4	0	4	0	0	0	4.0
野呂希一	言葉の風景	3	1	4	0	0	0	4.0
ドナルド・キーン	私と20世紀のクロニクル	4	0	4	0	0	0	4.0
北川智子	ハーバード白熱日本史教室 (新潮新書)	0	4	4	0	0	0	4.0
フレドリック・ヘレーン	スウェーデン式アイデア・ブック 2	4	0	4	0	0	0	4.0
小泉吉宏	こたえはボクにある : (ブッタとシッタカブッタ)	1	3	4	0	0	0	4.0
池上彰	そうだったのか!現代史 [パート1]	1	3	4	0	0	0	4.0
ムン・ホンジン	サムスン式仕事の流儀	1	3	4	0	0	0	4.0
アガサ・クリスティ	ねずみとり (ハヤカワ文庫)	3	1	4	0	0	0	4.0
マルキ・ド・サド	悪徳の栄え 上 (新・マルキ・ド・サド選集)	3	0	3	6	0	6	0.5
吉野源三郎	君たちはどう生きるか (岩波文庫)	3	0	3	6	0	6	0.5
福岡伸一	生物と無生物のあいだ (講談社現代新1)	1	2	3	5	0	5	0.6
五味太郎	わにさんどきつばいしやさんどきつ	3	0	3	3	0	3	1.0
本田和子	異文化としての子ども (ちくま学芸文庫)	3	0	3	0	2	2	1.5
宮沢賢治	校本宮澤賢治全集 第10巻・童話(3)・本文篇	3	0	3	2	0	2	1.5
P. F. ドラッカー	明日を支配するもの	3	0	3	2	0	2	1.5
徳井栄	二十四の瞳	3	0	3	1	1	2	1.5
石原千秋	大学生の論文執筆法 (ちくま新書)	3	0	3	2	0	2	1.5
ドストエフスキー	カラマゾフの兄弟 5 (光文社古典新訳文庫)	3	0	3	2	0	2	1.5
ドストエフスキー	カラマゾフの兄弟 改版 第2巻 (岩波文庫)	3	0	3	1	0	1	3.0
レオポルド・ショヴァー	年をとったワニの話 (ショヴァー氏とルノー君のお話集)	3	0	3	1	0	1	3.0
本田和子	異文化としての子ども	3	0	3	0	0	0	3.0
田村隆一	田村隆一詩集 続 (現代詩文庫)	3	0	3	0	0	0	3.0
吉田満	戦艦大和ノ最期 (講談社文芸文庫)	1	2	3	0	0	0	3.0
本多勝一	実戦・日本語の作文技術 (朝日文庫)	2	1	3	0	0	0	3.0
宮沢賢治	【新】校本宮澤賢治全集 第9巻・童話(2)・本文篇	3	0	3	0	0	0	3.0
ヴィクトル・ユゴー	レ・ミゼラブル 2 (ヴィクトル・ユゴー文学館)	2	1	3	0	0	0	3.0
堀谷剛彦	知的複眼思考法 (講談社+アルファ文庫)	1	2	3	0	0	0	3.0
吉野源三郎	君たちはどう生きるか	3	0	3	0	0	0	3.0
養老孟司, 竹村公太郎	本質を見抜く力 (PHP新書)	2	1	3	0	0	0	3.0
福澤諭吉	福翁自伝 (ちくま新書)	3	0	3	0	0	0	3.0
守能信次	スポーツ理論の論理	2	1	3	0	0	0	3.0
トマス・ブルフィンチ	ギリシア・ローマ神話 (角川文庫)	3	0	3	0	0	0	3.0
梅棹忠夫	情報の文明学 (中公文庫)	3	0	3	0	0	0	3.0
東京大学ジェントロジー・コンソーシアム	破綻を防ぐ10のフラン	3	0	3	0	0	0	3.0
東京大学高齢社会総合研究機構	「ジェントロジー」が、日本を世界の中心にする	3	0	3	0	0	0	3.0
鈴木敏彦, 松下希和, 中山繁信	世界で一番美しい建築デザインの教科書 (エクスナレッジムック)	1	2	3	0	0	0	3.0
池谷裕二	受験脳の作り方 (新潮文庫)	1	2	3	0	0	0	3.0
藤田統一	笑うカイチュウ (講談社文庫)	3	0	3	0	0	0	3.0
佐藤勝彦監修	「相対性理論」を楽しむ本 (PHP文庫)	3	0	3	0	0	0	3.0
上西一弘	栄養素の通になる	1	2	3	0	0	0	3.0
ヘッセ	シッダールタ (新潮文庫)	3	0	3	0	0	0	3.0
ニコラス・スバークス	きみに読む物語 (SB文庫)	1	2	3	0	0	0	3.0
まじこひでのり	イデオロギーとしての「日本」	3	0	3	0	0	0	3.0
南木佳士	医学生 (文春文庫)	3	0	3	0	0	0	3.0
新渡戸稲造	現代語訳武士道 (ちくま新書)	1	1	2	6	1	7	0.3
見田宗介	社会学入門 (岩波新書)	2	0	2	3	1	4	0.5
本田仁復	視覚の謎	2	0	2	3	0	3	0.7
野矢茂樹	入門!論理学 (中公新書)	1	1	2	3	0	3	0.7
上野千鶴子, 古市憲寿	上野先生、勝手に死なれちゃ困ります (光文社新書)	1	1	2	3	0	3	0.7
ヨースタイン・コルデル	ソフィーの世界	2	0	2	2	0	2	1.0
ヨースタイン・コルデル	ソフィーの世界 [普及版] 上	0	2	2	0	2	2	1.0
松岡正剛	17歳のための世界と日本の見方	0	2	2	0	2	2	1.0
ドストエフスキー	カラマゾフの兄弟 4 (光文社古典新訳文庫)	2	0	2	2	0	2	1.0
野家啓一	物語の哲学	2	0	2	1	0	1	2.0
鎌谷八郎	アイデンティティの心理学 (講談社現代新書)	0	2	2	1	0	1	2.0
宮沢賢治	【新】校本宮澤賢治全集 第10巻・童話(3)・校異篇	2	0	2	1	0	1	2.0

著者・作者	タイトル	長久手 本館	星が丘 分館	2013-2014 集計	長久手 本館	星が丘 分館	2011-2012 集計	伸び率
福澤諭吉	福翁自伝/福澤全集緒言 (福澤諭吉著作集)	2	0	2	1	0	1	2.0
ステイヴン・ローヴェット, スティーヴン・J・ダブナー	ヤバい経済学	2	0	2	1	0	1	2.0
ドストエフスキー	カラマーゾフの兄弟 3 (光文社古典新訳文庫)	2	0	2	1	0	1	2.0
リチャード・ムラー	今この世界を生きているあなたのためのサイエンス 1	1	1	2	1	0	1	2.0
藤原正彦	名著講義	2	0	2	0	1	1	2.0
中谷宇吉郎	科学の方法 (岩波新書)	2	0	2	0	0	0	2.0
野呂希一	言葉の風景 続	2	0	2	0	0	0	2.0
川田順造	口頭伝承論 上 (平凡社ライブラリー)	2	0	2	0	0	0	2.0
川田順造	口頭伝承論 下 (平凡社ライブラリー)	2	0	2	0	0	0	2.0
ヴィクトル・ユゴー	レ・ミゼラブル 3 (ヴィクトル・ユゴー文学館)	1	1	2	0	0	0	2.0
巖相葉月	ビヨンド・エジソン	2	0	2	0	0	0	2.0
佐藤望編	アカデミック・スキルズ 第2版	0	2	2	0	0	0	2.0
二宮まのりお	ピアノはともだち	2	0	2	0	0	0	2.0
日本経済新聞社編	ニッポンこの20年	1	1	2	0	0	0	2.0
野家啓一	物語の哲学 (岩波現代文庫)	1	1	2	0	0	0	2.0
宮崎俊三	時刻表昭和史 増補版 (角川文庫)	2	0	2	0	0	0	2.0
遠藤周作	沈黙 改版 (新潮文庫)	2	0	2	0	0	0	2.0
内田百閒	百鬼園隨筆 (新潮文庫)	2	0	2	0	0	0	2.0
橋本浩	図解だれでもわかるユビキタス	2	0	2	0	0	0	2.0
宮沢賢治	銀河鉄道之夜/風の又三郎/セロ弾きのゴーシュほか (ちくま文庫)	2	0	2	0	0	0	2.0
水本弘文	「星の王子さま」の見えない世界	2	0	2	0	0	0	2.0
E.B. ゼックムスタ, J.E. ジョンソン	クリティカルシンキング	1	0	1	11	0	11	0.1
アドルフ・ホルトマン	人間はどこまで動物か (岩波新3)	1	0	1	3	1	4	0.3
加藤陽子	それでも、日本人は「戦争」を選んだ	1	0	1	3	1	4	0.3
ニコラス・スバークス	きみに読む物語	1	0	1	2	0	2	0.5
ジュディス・L・ハーマン	心的外傷と回復 増補版	1	0	1	2	0	2	0.5
土方洋一	「古典を勉強する意味ってあるんですか?」	1	0	1	2	0	2	0.5
福沢諭吉	福翁自伝 新訂 (岩波文庫)	1	0	1	0	1	1	1.0
ユゴー	レ・ミゼラブル 1 (岩波文庫)	0	1	1	0	1	1	1.0
カズオ・イシグロ	日の名残り	1	0	1	0	1	1	1.0
宮沢賢治	【新】校本宮澤賢治全集 第11巻: 童話 (4). 萩真篇	1	0	1	1	0	1	1.0
鈴木孝夫	日本語と外国語 (鈴木孝夫著作集)	0	1	1	0	1	1	1.0
ヘッセ	車輪の下で (光文社古典新訳文庫)	1	0	1	1	0	1	1.0
リチャード・ムラー	今この世界を生きているあなたのためのサイエンス 2	1	0	1	1	0	1	1.0
ドストエフスキー	カラマーゾフの兄弟 1 (光文社古典新訳文庫)	1	0	1	1	0	1	1.0
小林康夫, 船曳雄夫編	知の技法	1	0	1	0	0	0	1.0
小泉義之	ドゥルーズの哲学 (講談社現代新書)	1	0	1	0	0	0	1.0
松浦久夫	漢詩 (岩波新書)	1	0	1	0	0	0	1.0
平井伯昌	突破論	1	0	1	0	0	0	1.0
外山証比古	ライフワークの思想 (ちくま文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
新田次郎	聖職の碑 (講談社文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
徳井栄	二十四の瞳 (新潮文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
アーサー・コナン・ドイル	バスカヴィル家の犬 (創元推理文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
森田信吾	栄光なき天才たち 1 (集英社文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
森田信吾	栄光なき天才たち 2 (集英社文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
宮沢賢治	『春と修羅』/『春と修羅』補遺/『春と修羅』第二集 (ちくま文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
宮沢賢治	貝の火/よだかの星/カイロ団長ほか (ちくま文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
バーチャルメディア工房さふ編	ブレイブ・ワーカース	1	0	1	0	0	0	1.0
カズオ・イシグロ	日の名残り (ハヤカワepi文庫)	1	0	1	0	0	0	1.0
ドストエフスキー	カラマーゾフの兄弟 改版 第1巻 (岩波文庫)	0	0	0	10	0	10	0.0
渡部泰明	和歌とは何か (岩波新書)	0	0	0	6	0	6	0.0
井上真琴	図書館に訊け! (ちくま新書)	0	0	0	4	1	5	0.0
ショウベン・ハウエル	読書について (岩波文庫)	0	0	0	4	0	4	0.0
この国のみそ!取材班	ナゴヤ全書	0	0	0	2	2	4	0.0
吉野源三郎	君たちはどう生きるか (岩波文庫)	0	0	0	0	3	3	0.0
レイチェル・カーソン	センス・オブ・ワンダー	0	0	0	3	0	3	0.0
宮沢賢治	【新】校本宮澤賢治全集 第11巻: 童話 (4). 本文篇	0	0	0	2	0	2	0.0
ヘルマン・ヘッセ	車輪の下/物語集 (ヘルマン・ヘッセ全集)	0	0	0	2	0	2	0.0
ショウベン・ハウエル	読書について 他二篇 (岩波クラシックス)	0	0	0	0	1	1	0.0
竹内敏晴	からだ・演劇・教育 (岩波新書)	0	0	0	1	0	1	0.0
直塚晴子	欧米人が沈黙するとき	0	0	0	1	0	1	0.0
橋爪大三郎	はじめての構造主義 (講談社現代新書)	0	0	0	1	0	1	0.0
宮沢賢治	【新】校本宮澤賢治全集 第8巻: 童話 (1). 本文篇	0	0	0	1	0	1	0.0
森本孝	青春彷徨 (あるくみるく双書)	0	0	0	0	1	1	0.0
沖大幹	水危機ほんとうの話 (新潮選書)	0	0	0	0	1	1	0.0
福岡伸一	世界は分けてもわからない (講談社現代新書)	0	0	0	1	0	1	0.0
ジュリアン・ロイド・ウェッバー	パブロ・カザルス鳥の歌	0	0	0	0	0	0	0.0
三本清	人生論ノート	0	0	0	0	0	0	0.0
米沢富美子	二人で紡いだ物語 (朝日文庫)	0	0	0	0	0	0	0.0
探代千之	「知的」スポーツのすすめ	0	0	0	0	0	0	0.0
枝川公一	ぼくらの瀕死のデモクラシー	0	0	0	0	0	0	0.0
中村啓信	古事記 (角川文庫)	0	0	0	0	0	0	0.0
		815	303	1,118	339	124	463	2.4